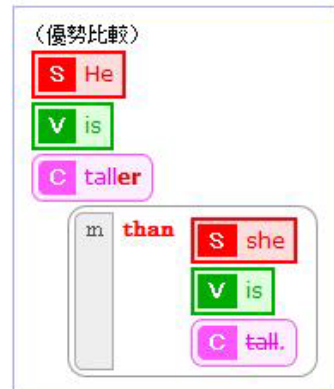
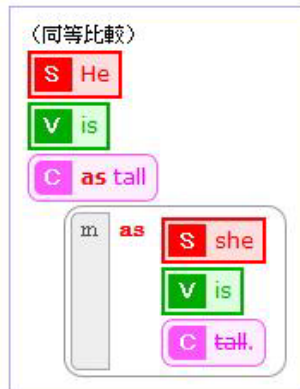
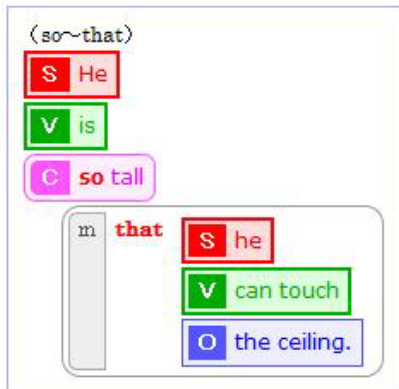


# 英文構造図

## I. 基本編

- 第 2 版 -



# 目次

まえがき 1

## 1 英文構造図とは ..... 4

---

1.1 既存の方法 4

1.2 新しい記法の提案 6

1.3 構造図の特徴と使い方 8

構造図の特徴 / もたらされるもの / 手書きかパソコンか

## 2 5文型の予備知識 ..... 12

---

2.1 主部と述部 12

2.2 5文型の一覧 13

第1文型 (SV) / 第2文型 (SVC) /  
第3文型 (SVO) / 第4文型 (SVOO) /  
第5文型 (SVOC) / 5文型を並べてみる /  
文の要素と品詞との関係

2.3 動詞と助動詞 17

述語動詞と助動詞 / 主な助動詞

2.4 否定文と yes/no 疑問文 20

Vが一般動詞 (助動詞なし) の場合 /  
助動詞がある場合 / Vが be 動詞の場合

2.5 修飾 22

修飾語と被修飾語の組み合わせ /  
形容詞 (名詞を修飾する) /  
副詞 (動詞や文全体を修飾する) /  
Mの種類と置き場所 /  
動詞 + 副詞 / 副詞 (形容詞・副詞を修飾する)

|          |                                   |           |
|----------|-----------------------------------|-----------|
| <b>3</b> | <b>第1文型 = S + V</b> .....         | <b>30</b> |
| <hr/>    |                                   |           |
| 3.1      | 一般的なもの                            | 30        |
|          | 典型例 / 助動詞や “ not ” /              |           |
|          | 助動詞と動詞の間にある副詞                     |           |
| 3.2      | 副詞Mが必須のもの                         | 31        |
| 3.3      | There 構文 ( S V の一種とされる )          | 32        |
|          | 典型例 / 動詞が一般動詞の場合 / 否定文と疑問文        |           |
| <b>4</b> | <b>第2文型 = S + V + C</b> .....     | <b>33</b> |
| <hr/>    |                                   |           |
| 4.1      | be 動詞                             | 33        |
|          | 典型例 ( C が形容詞句 ) / 典型例 ( C が名詞句 )  |           |
| 4.2      | 直後にmが必須のもの                        | 34        |
| 4.3      | その他の動詞                            | 35        |
| <b>5</b> | <b>第3文型 = S + V + O</b> .....     | <b>36</b> |
| <hr/>    |                                   |           |
| 5.1      | 一般的なもの                            | 36        |
|          | 典型例 /                             |           |
|          | V に対してMが、また S や O に対してmが付随している例   |           |
| 5.2      | Mが必須のもの                           | 37        |
| <b>6</b> | <b>第4文型 = S + V + O + O</b> ..... | <b>38</b> |
| <hr/>    |                                   |           |
| 6.1      | S V O O そのもの                      | 38        |
|          | 典型例    give 型 / 典型例    buy 型 /    |           |
|          | V に対してMが、また S や O に対してmが付随している例   |           |
| 6.2      | S V O M ( 第3文型 ) への書き換え           | 40        |
|          | give 型の場合 / buy 型の場合              |           |

## 7 第5文型 = S + V + O + C ..... 41

---

- 7.1 伝統的な考え方 41  
Cが名詞の場合 / Cが叙述形容詞の場合 /  
Cが現在分詞の場合 / Cが過去分詞の場合 /  
Cがto不定詞の場合 / Cが原形不定詞の場合 /  
Vに対してMが、またSやOやCに対してmが付随している例
- 7.2 最近の英語学の立場からは 44

## 8 時制と態 ..... 45

---

- 8.1 受動態 45  
SVO / SVOO / SVOC
- 8.2 時制 49  
基本 / Mとの関係
- 8.3 長崎玄弥氏の96型ドリル 52  
概要 能動態 / 概要 受動態 / 注意 /  
基本を侮るなかれ / 効用の範囲

## 9 文の種類 ..... 55

---

- 9.1 wh疑問文 55  
SVCのC(主格補語)について / Oについて /  
前置詞のOについて / C(目的格補語)について /  
Sについて / 所有格について / Mについて /  
mについて
- 9.2 付加疑問文と命令文 62  
付加疑問文 / 命令文
- 9.3 転換練習 64  
概要 / 96型との比較 / 拡張を試みる / 更なる拡張

## まえがき

### 本書の由来

本書は、ほぼ半年前に発行した『英文構造図 基本編』の改訂版である。

基本的な内容に変更はないが、日本英語教育学会での発表から得られた見地を加味することにより正確さを増しているだけでなく、文字サイズ等を見直すことにより読みやすくなっている。

注) 学会で使用した素材は自由に閲覧できる。

<http://kouzouzu.web.fc2.com/presentation/jelesdemo130316index.htm>

### 言語は文の集まり

言語活動と言えば「話す」「書く」「聞く」「読む」であり、それぞれに多数の教材が存在している。もちろん文法や音声面についての教材もある。しかし、言語活動における<言語>とは、何よりも「文」を基本的な単位とした存在である。

もちろん「文」の中には更に細かな要素が存在しているが、それらは「文」の中での位置づけ抜きに語ることはできない。その意味において、「文」という単位が持つ重要性は特別なものであると言ってよいであろう。

### 文を攻略するために

ゆえに、語学においては個々の「文」を攻略することが極めて大切である。

では、そのために必要なことは何か？ 語句の意味や語形変化を覚えることはもちろんであるが、同時に文の構造を的確に理解し、運用できるようになることも必要である。

### どうやればよいか？

さて、これは文に限ったことではないが、構造を理解するには図に書いてみるのが有効である。そのための方法はこれまでもいくつか提案されているものの、いずれも一般学習者向けの決定版とはなっていないように思われる。

## 「英文構造図」の登場

そこで開発されたのが、本書で紹介する新しい「英文構造図」である。最初は手書き中心の方法であったが、現在はパソコンを使用するものにグレードアップしている。その特徴は、「使いやすく、読みやすく、覚えやすいものでありながら、学習者に必要とされる程度の厳密さも十分に維持している」というところにある。もちろん、手書きによる活用も可能である。

## 全体構造と各章の目標

まずは全体構造であるが

- ・ 基本編
- ・ 発展編
- ・ 活用編

という3部構成（3分冊）になっている。

本書「 」は簡単な導入から始まり、いわゆる5文型の基本について説明する。あわせて、修飾、否定文と疑問文、時制についても扱う。

「 」は、「 」で学んだ基本的な文をもとにして、重層的な構造をもった文へと進んでいく。ここまでを丁寧に学べば、『FOREST』はもちろん『ロイヤル英文法』などの分厚い文法書にも自力で取り組めるだけの力が付くはずである。

「 」においては、名著『物理数学の直観的方法』（長沼伸一郎、講談社ブルーバックス）の構文版たるべく、多くの人が躓く厄介な構文を、誰にでも直観的に理解できるように解説している。また、後半部分ではさまざまな事例について構造図を掲載し、例文学習の方法について解説している。

**【注意1】** 本三部作はあくまでも文の構造に特化したものなので、文構造的に容易なテーマ（冠詞や助動詞の使い方とか仮定法などなど）には触れていない。その意味で、通常の教科書・文法書との併用は必須である。

**【注意2】** 文構造の解釈については、安藤『現代英文法講義』（開拓社）など多数の資料を参照したが、本書で紹介しているものが唯一絶対というわけではない。大切なのは自分の頭で主体的に考えることであるから、結果として違う考えに到達したとしても問題ない。むしろ、その「違い」をどう視覚化するかを考えることが勉強になる。そして、そのような場合にも対応できるだけの柔軟性を本書の方法は持っている。

## 是非ご活用を

本書で紹介する方法は「これさえ知っていればどんな英文でも読めるようになる」というような魔法の杖ではない。しかし、普段からの学習に組み入れることで、教材内容の理解度・吸収度を高めることができるはずである。

まず最初は本書に軽く目を通して概要を把握する。そしてその後は、手元の教科書や文法書の例文を一つひとつ図式化しながら学んでいくのがよい。理解しただけで安心するのではなく、自分の頭で考えながら多くの事例と格闘することなくしては、構造把握の力はつかないであろう。これは数学などにおいて多量の演習が必要なのも同じである。自力で頑張る人には、本書に掲載された多数の実例が大いに役立つはずである。

本書が多くの英語学習者、そして教育者や研究者の方々に（さらに英語に限らず他の言語に関しても）ご利用いただけるならば、著者としてこれに優る喜びはない。

著 者

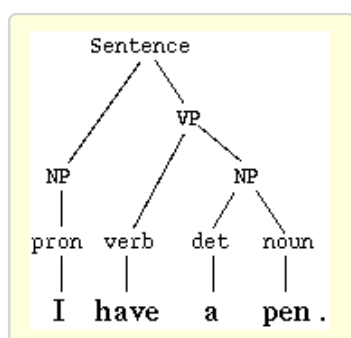
# 1 英文構造図とは

## 1.1 既存の方法

構造図と呼べるものは過去にも存在している。ここでは代表的なものを紹介したい。

### 樹形図 (tree diagram)

「構文木 (こうぶんぎ)」などとも呼ばれ、言語学 (特に生成文法) で使われている。

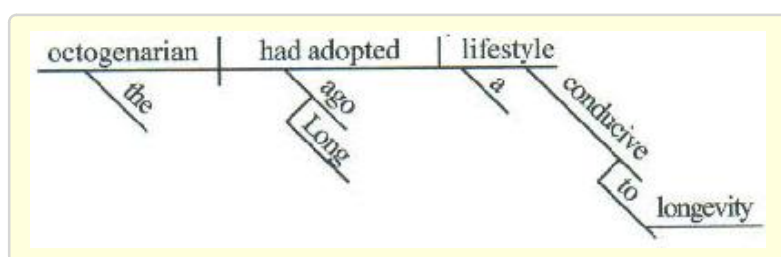


【出典】 <http://upload.wikimedia.org/wikipedia/ja/2/2c/EnglishSyntaxTreeSample1.png>

言語学で使われるだけあってさすがに緻密ではあるが、通常の学習で使用するには少し荷が重いであろう。多数の略語も敷居を高くしている。

### センテンス図 (Sentence diagram)

これも言語学で使われている。



【出典】 <http://www.german-latin-english.com/basicdiagrams21-25.htm>

こちらは難解な略語を含んでいない。ただ、図から原文を再現して音読しようとする、視線をあちらこちらへと走らせなくてはならない。これではスムーズに音読することはできない。



## 1.2 新しい記法の提案

### どんなものがよいか

では、英文の構造図としてはどのようなものが理想的なのだろうか？

もし仮に理論的な検討が主目的であれば、何よりも緻密さが最優先されるべきであろうし、そのために分かりやすさがある程度犠牲になることはやむを得ない。上で紹介したいいくつかの記法（特に樹形図）がそれに当てはまる。

### 学習用としての扱いやすさ

しかし、英文を学習するという観点からは、一目で理解できるだけの分かりやすさが不可欠である。具体的には次のような要件を充たす必要があるだろう。

- ・ 原文の語順が保存されていて、復元が容易である（簡単に音読できる）。
- ・ 文全体における各チャンク（要素）間の相互関係が明瞭である。
- ・ チャンクの種類や役割が識別しやすい。
- ・ 各チャンクの内部構造が分かりやすい。
- ・ 複数階層の入れ子構造であっても無理なく視覚化することができる。
- ・ 受信にも発信にも、また文字言語にも音声言語にも、活用することができる。

## 同時にそれなりの緻密さも

また、前出『リストラ・学習英文法』では、構造図によって示されるべき文法関係として

1. 動詞とその主語，目的語，補語との関係
2. 前置詞とその目的語，補語との関係
3. 修飾関係
4. 補文化子と節の関係
5. 等位関係
6. 同格関係
7. 独立関係
8. 引用
9. 動詞構成関係

を提示（p.19）したうえで、

これだけのものを段階的に cyclic に用いることによって英文のすべての構造を記述しようとするものである。従来の文法教科書・学習参考書等に含まれている数多くの項目も、考え方を統一し視点を定めて整理すれば、このわずか9項目で整然と収まりがつく。

と述べている（p.20）。となれば、これらの文法関係を的確に表示できることは、新しい構造図においても必須であると考えられるべきであろう。

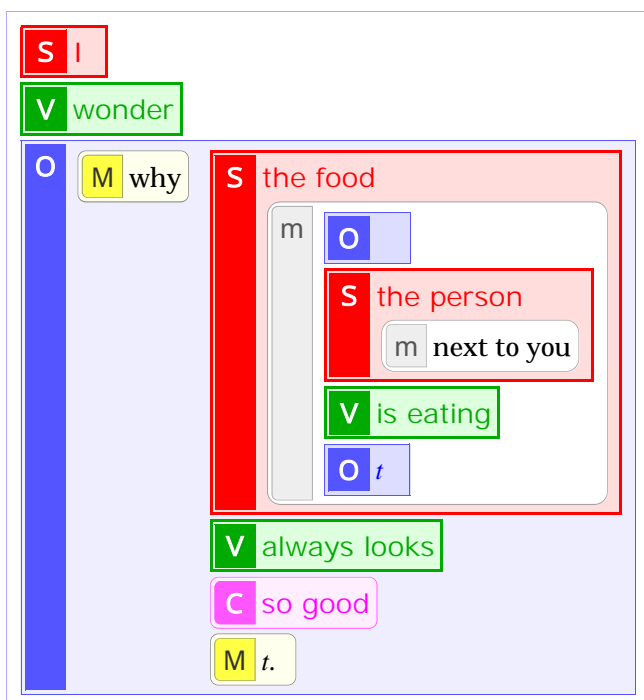
## さて

これらの要求を満たすような新しい構造図が欲しいわけであるが、はたしてそんなことが可能なのか？ 答えはYESであり、それを最大限に活用して英文の構造を攻略することが本三部作のテーマである。

## 1.3 構造図の特徴と使い方

### 構造図の特徴

まず、この例をご覧ください。



英文構造図は意味のかたまりごとに視覚的なまとまりを作り、それらをまずは縦に配置していく（、つまり本書で扱う）。そして、階層構造になる部分は、横にずらすことで表示する（以降）。そのようにタテとヨコを使い分けることにより、要素間の立体的な関係が非常に明確になる。それは、**文の構造と要素とを、それらの間の密接な関係を断ち切ることなく、視覚的に分離することができる**、ということである。

また、本方式には、**原文の語順が完全に保存される**という特徴がある。そのため、完成した構造図は、**単純に左上から順に読んでいけば、原文を再現することができる**。音読するときにもストレスを感じないだけでなく、構造が把握しやすい分、原文よりも読みやすいとさえ言える。逆に英文を図式化するときにも、余計なことに頭を使わなくて済む。

つまり、この方式の主な特長は

- 原文の**語順**が維持されている。
- 多段入れ子構造**を見やすい配置で示している。
  - ・ 同じ階層では、要素をタテに並べる。
  - ・ 入れ子構造は、右への移動で示す。
- 色分け等**により識別しやすい。

というところにある。中でも が本方式の本質的な性格であり、日本英語教育学会におけるデモ（2013/03/16@早大）においては「語順と多段入れ子構造との両立」として

提示したところである。

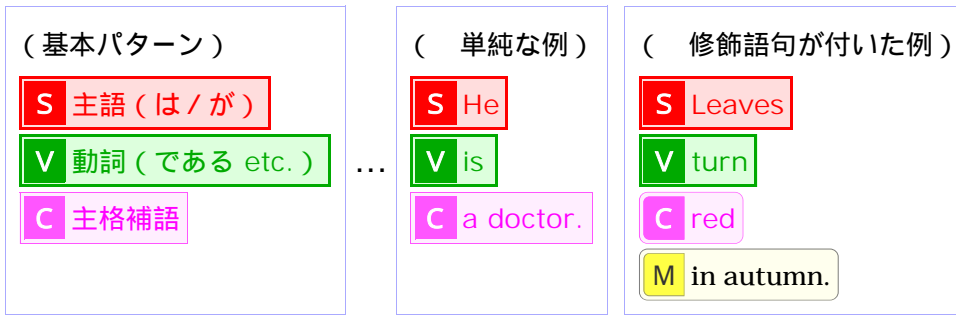
**【補足】** 樹形図などで使われる枝分かれ表示と本方式のような領域分割による表示とを比較すると、基本的には1対1の対応が存在する。しかしながら本方式では要素の「配置」をも活用しているため、より高い表現力を持っている（具体例は「8.2 時制」の「Mとの関係」をご覧ください）。その一方で、樹形図において交差した線で表されるような構造については、括弧書きで注釈を入れることでフォローしている。

これらの特長のおかげで、文法・構文プロパーの学習だけではなく、4技能すべての学習で活用することができる。

実際にお使いになればおわかりのように、本方式には次のようなメリットがある。

- ・ たいていの英文は本方式で簡単に図式化できる。
- ・ 図式化することにより、より基礎的な構造とのつながりが理解できる。
- ・ 図式化の出来具合で構造理解の程度が端的に示される。
- ・ 図式化の過程で悩むことが更なる問題意識の涵養につながることも多い。
- ・ 文中の語句を同時に学ぶことができる。
- ・ 見直すときにも分かりやすい。
- ・ 語順が維持されているので音読しやすい。

## 第2文型 (SVC)



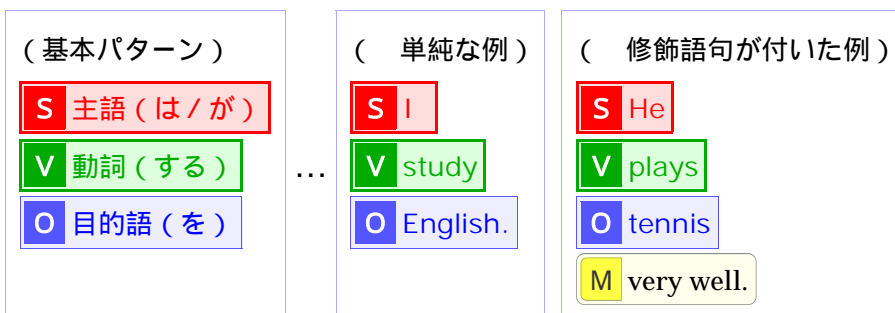
【原文】 He is a doctor.  
Leaves turn red in autumn.

【説明】 は「葉 (複数) は秋に赤くなる」の意。  
主格補語 **C** (subjective Complement) は新しい登場人物ではなく、ごく大ざっぱに言えば「S = C」の関係にある。つまり、「彼 = 医者」「葉 = 赤」ということ。(「=」というのはあまり正確な表現ではないが、暫定的に使用する。)

【補足】 **C** が “a doctor” のような名詞句の場合は普通の長方形であるが、“red” のような形容詞句の場合には角を丸くして区別している。

【注意】 ここで「名詞句」「形容詞句」というのは、「名詞として働く句」「形容詞として働く句」という意味である(「副詞句」も同様)。そのため「形容詞 + 名詞」は「名詞句」、「副詞 + 形容詞」は「形容詞句」と呼んでいる。通常の文法用語とはやや異なる使い方をしているので、注意されたい。

## 第3文型 (SVO)



【原文】 I study English.  
He plays tennis very well.

【説明】 目的語 **O** (Object) は **S** とは別の存在。つまり、「S ≠ O」。

## 2.4 否定文とyes/no疑問文

いずれも文全体の肯定・否定・疑問であり、第1～5文型に共通する。なお、V以外の各要素（S・O・C・M・m）について尋ねるときにはwh疑問文（後述）を用いる。

### Vが一般動詞（助動詞なし）の場合

| （肯定平叙文）                                | （否定平叙文）                                       | （肯定疑問文）                                         | （否定疑問文）                                            |
|----------------------------------------|-----------------------------------------------|-------------------------------------------------|----------------------------------------------------|
| S His dog<br>V laughs<br>M very often. | S His dog<br>V doesn't laugh<br>M very often. | 助 Does<br>S his dog<br>V laugh<br>M very often? | 助 Doesn't<br>S his dog<br>V laugh<br>M very often? |

【説明】肯定平叙文以外では助動詞“do/does/did”が出現する（動詞は原形になる）。否定文はその助動詞の直後に“not”を置く。疑問文ではその助動詞が前に出る。

### 助動詞がある場合

| （肯定平叙文）            | （否定平叙文）              | （肯定疑問文）                 | （否定疑問文）                   |
|--------------------|----------------------|-------------------------|---------------------------|
| S He<br>V can fly. | S He<br>V can't fly. | 助 Can<br>S he<br>V fly? | 助 Can't<br>S he<br>V fly? |

【説明】疑問文では、その助動詞を主語の前に置き、それ以降は元の位置に残す。

【注意】進行時制や受動態（いずれも後述）のbe動詞、完了時制（後述）の“have”も助動詞と考える。助動詞が2つ以上重なる場合は、最初の1つだけを出す。

## 6 第4文型 = S + V + O + O

### 6.1 SVOOそのもの

主語S + 動詞Vの後に目的語Oが2つ続くもの。2つの目的語は違う役割を果たしている。

|       | 名称    | 基本的な意味 |
|-------|-------|--------|
| 1つ目のO | 間接目的語 | 誰々に    |
| 2つ目のO | 直接目的語 | 何々を    |

#### 典型例 give型

|   |                     |
|---|---------------------|
| S | Steve               |
| V | gave (与えた)          |
| O | his daughter (彼の娘に) |
| O | a beautiful doll.   |

【説明】 “gave” は “give” (与える) の過去形。

【付記】 give型の動詞としては他に bring, lend, sell, pay, show, teach, tell などがある。

【注意】 2つ目のOが “it” などの代名詞である場合は、次に述べるSVOMを使用する。このときのMに使う前置詞によって「give型」「buy型」が識別される。

#### 典型例 buy型

|   |                 |
|---|-----------------|
| S | Bill            |
| V | bought (買ってあげた) |
| O | Liz (リズに)       |
| O | a nice present. |

【説明】 “bought” は “buy” (買う) の過去形。

【付記】 buy型の動詞としては他に get, make, find, choose などがある。

【注意】 同上。

## 8.3 長崎玄弥氏の96型ドリル

これは、長崎玄弥氏が若い頃（終戦直後）に徹底的に実践した方法であり、12の時制と2つの態をまとめて練習できるスグレモノである。『奇跡の英文法』（祥伝社）、『長崎玄弥の英語の攻め方』（アルク）、『英語スピーキング特訓ラップ』（同）などで紹介されている。

### 概要 能動態

具体的には、まず現在時制について **肯定平叙文** **肯定疑問文** **否定平叙文** **否定疑問文** の順に言っていき、他の時制についても同様に行う。つまり、

“Jack **drives** a red sportscar.”（現在形の肯定平叙文）  
 “**Does** Jack **drive** a red sportscar?”（現在形の肯定疑問文）  
 “Jack **doesn't drive** a red sportscar.”（現在形の否定平叙文）  
 “**Doesn't** Jack **drive** a red sportscar?”（現在形の否定疑問文）  
 “Jack **drove** a red sportscar.”（過去形の肯定平叙文）  
 （中略）  
 “**Won't have** Jack **been driving** a red sportscar?”（未来完了進行形の否定疑問文）

のようにする。時制の種類は少しずつ増やしていくが、現在・過去・未来は常にワンセットとして扱うとよい。12時制で48文となる。具体的な順序は、先に「Vの活用一覧」として紹介した表と同じである。

### 概要 受動態

能動態になれば、今度は受動態の48文を同じ要領でドリルする。つまり、

“A red sportscar **is** driven by Jack.”（現在形の肯定平叙文）  
 “**Is** a red sportscar driven by Jack?”（現在形の肯定疑問文）  
 “A red sportscar **isn't** driven by Jack.”（現在形の否定平叙文）  
 “**Isn't** a red sportscar driven by Jack?”（現在形の否定疑問文）  
 “A red sportscar **was** driven by Jack.”（過去形の肯定平叙文）  
 （中略）  
 “**Won't** a red sportscar **have been being** driven by Jack?”（未来完了進行形の否定疑問文）

のようにする。こちらも12時制で48文となる。